

研究ノート 杜甫「進?賦表」訳注

著者	谷口 眞由実
雑誌名	中国文化：研究と教育
巻	77
ページ	88-98
発行年	2019-06-29
URL	http://doi.org/10.15068/00157142

杜甫「進鵬賦表」 訳注

解題

「進鵬賦表（鵬の賦を進むる表）」は、杜甫が「鵬賦（鵬の賦）」を玄宗皇帝に献上するのの際して、献上の理由を述べた表である。「表」は、文体名の一つで、事理を明らかにして君主に告げる文である⁽¹⁾。

杜甫が「鵬の賦を進むる表」及び「鵬賦」を作成し、玄宗皇帝に献上したのは、蕭滌非主編『杜甫全集校注』（人民文学出版社、二〇一四年）では仇兆鰲の説に「表中に『七歳自^よ綴^{なづ}る筆、四十年に向^{むか}とす』とあり、制作年次は、杜甫が『三大礼賦』を進めた後で、天宝十三載に作ったのであろう⁽²⁾』とあるを踏まえて、天宝十三載（七五四）のこととする。制作年次を天宝十三載とすれば、杜甫は天宝十載に献じた賦「三大礼賦」が称賛されて玄宗の目にとまり、集賢院に待制を命じられていたが、その後沙汰のないなか、

谷 口 眞由実

拔擢され仕官することを切望していた時期に当たる。

当該作品について論じた先行論文として、吹野安「『進鵬賦表』発想考」（『國學院雑誌』八十三巻五号、一九八二年五月、一頁〜十二頁）がある。吹野氏は、この文章は陳情と自身の推薦を兼ねる自己推薦の文であり、政治性・思想性は薄い一方、上表文としては世俗から超越した趣きがあると指摘している。

「鵬賦」は、表面的には「鵬」を詠じた詠物的な作品である。しかし、実は自身の理想像を「鵬鶚」に託して現在の朝廷の政治を諷刺するとともに、皇帝に自分こそが大臣として有為な人物であることを述べて、仕官を求める自己推薦の作と考えられる。「鵬賦」については、別途訳注を發表する予定である。

次に、全篇の内容を簡潔に述べておきたい。本訳注では蕭滌非主編『杜甫全集校注』を底本とし（詳細は後述）、

当該書にない全体を三段に分ける。⁽³⁾

第一段落は、「臣甫言」から「師之」まで。先祖の称揚や、自身の家が儒学を奉じてきた家系であることを述べる。第二段落は、「臣幸」から「死罪」まで。自己の才能、特に文学の才能について、賦の名手である揚雄や枚臯らに擬えて自負を述べる。第三段落は、「臣以」から「謹言」まで。「鵬」は、天子の狩獵での威儀を添える存在にとどまらず、大臣が顔色を厳正にして朝廷に立つ姿、英雄のたまたまいを有することを述べる。

なお、「鵬」は、「進鵬賦表」及び「鵬賦」においては「鶚」と同意で用いられている。『史記』卷一百九、李將軍列伝の「是れ必ず雕を射る者なり」の索隠に、「案ずるに、服虔云う、「雕は、鶚なり」と。説文に云う、「鶚に似て、黒色、多子」と。一名鶚、其の毛を以て矢羽を作る。韋昭云う、「鶚は、一名雕なり」ととある。また、杜甫「鵬賦」に「一鶚の直上するを見る」、「伊れ鶚鳥 百を累ぬるも、……」とあり、これは、『文選』卷三十七、孔融「薦禰衡表（禰衡を薦むる表）」に「鶚鳥 百を累ぬるも、一鶚に如かず。衡をして朝に立たしめば、必ず観るべきあらん」を踏まえた表現であろう。孔融は禰衡を「鶚」に擬えて拔擢を求めている。この李善注には、『史記』に「趙簡

子曰く、鶚鳥百を累ぬるも、一鶚に如かず」とあるのを引く。ほかに、『文選』卷三十九、鄒陽「上書呉王」（呉王に上書す）に、「臣聞く、鶚鳥百を累ぬるも、一鶚に如かず」とあり、その李善注に「猛康曰く、「鶚は大鵬なり」と。如淳曰く、「鶚鳥は諸侯に比し、鶚は天子に比す」とある。

「鵬」は、『類聚名義抄』（僧中）に「禾シ・オオ禾シ・クマタカ」（クマタカは小字）とあり、『倭名類聚抄』（卷十八、羽族名）の「鵬鶚」に、『唐韻』に云う、「鶚は、大鵬なり」と。鶚は、鶚、古の和之なり。鶚鳥の別名なり。『山海経』の注に云う、「鶚は、小鵬なり」と。⁽⁴⁾ここでは、「鵬」と「鶚」に「ワシ」の和訓を使うこととする。

訳注

底本については、谷口匡「杜甫『説旱』訳注」（『中国文学』第七十六号、二〇一八年六月三十日発行）を参考にし、蕭滌非主編『杜甫全集校注』を用い、校勘・訳注には『宋本杜工部集』（続古逸叢書影印本、略称「宋本」）、宋・李昉等『文苑英華』（中華書局影印本、略称「英華」）、宋・姚鉉『唐文粹』（四部叢刊本、略称「文粹」）、元・高崇蘭『集千家註批点杜工部文集』（元・会文堂刊本天理図書館善

本叢書『集千家註批点杜工部詩集』、略称「高本」、清・錢謙益箋注『杜工部集』（大通書局杜詩叢刊影印本）「錢牧齋先生箋注杜詩」、略称「錢本」、清・朱鶴齡輯注『杜工部文集』（京都大学蔵金陵葉永茹万卷樓刻本）「杜工部全集」、略称「朱本」、清・張潛『讀書堂杜工部文集註解』（大通書局杜詩叢刊影印本、齊魯書社排印本、略称「張本」）、清・仇兆鰲『杜詩詳注』（中華書局排印本、略称「仇本」）、『全唐文』（中華書局影印本、山西教育出版社排印本）、謝思煒『杜甫集校注』（上海古籍出版社、二〇一五年）の諸本を参照した。なお、本文は原則として底本に従ったが、一部正字に改めた場合がある。訓読、語釈では校勘を除いて、新字体を用いた。

なお、本訳注は、筆者が、二〇一八年五月二十六日に杜甫散文研究会（於東京女子大学）で草稿を発表し、そこで検討を経て修正を加えたものである。

〔題〕

進鵬賦表

鵬おおわしの賦を進むる表

「鵬の賦」を皇帝に献上する表

進鵬賦表

英華は「鵬賦 并進表」に作る。錢本は題下に「天寶三載」と注している。全唐文、謝本は「鵬」を「雕」に作る。「鵬」は猛禽類であることは間違いないが、高木正一氏は「杜甫の馬・鷹の詩について」（『中國文學報』第十七冊、一九六二年十月）では、「タカ」と訓んでいる。解題で先述のように、「鵬」「鶚」をここでは「ワシ」と訳す。

〔一〕

臣甫言。臣之近代陵夷、公侯之貴摩滅、鼎銘之勲、不復照耀於明時。自先君恕預以降、奉儒守官、未墜素業矣。亡祖故尚書膳部員外郎先臣審言、脩文於中宗之朝、高視於藏書之府。故天下學士、至于今而師之。

臣甫言す。臣の近代は陵夷し、公侯の貴も摩滅し、鼎銘の勲、復た明時に照耀せず。先君恕・預自り以降、儒を奉じ官を守り、未だ素業を墜とさず。亡祖故の尚書膳部員外郎先臣審言は、中宗の朝に修文たりて、藏書の府に高視す。故に天下の學士、今に到るまで之を師とす。

私杜甫が申し上げます。私に近い時代の杜氏の祖先の状況は、次第に衰え、諸侯のような高貴な位に就く者も減少して、鼎に彫り込まれるような赫々たる勲功が、天下泰平の御代に燦然と輝くことはもうなくなりました。（しかし、）祖先の杜恕や杜預より以降、歴代の先祖は儒学を奉じて官職につとめ、我が家本来の仕事を失墜させることはありませんでした。亡祖父の元の尚書膳部員外郎としてお仕えしました杜審言は、中宗の朝廷において修文館直学士を務め、著作郎として文章に高い見識を現しました。そのため、天下中の学士たちが、今なお杜審言を師と仰いでおります。

近代 近い世代の祖先。祖父や父親ら先代を指す。『晋書』卷三十三、何劭伝に「近代の事を陳説すること、諸を掌に指すが若し」とある。

陵夷 地勢が高い所から低い所へとくだらかに下ること。物事が次第に衰えすたれる。杜甫の祖父杜審言、杜閑らが官職の面ではあまり高位でなかったことをいう。『漢書』卷十、成帝紀に「帝王の道、日々に以て陵夷す」とある。公侯之貴 公爵や侯爵などの高貴な位。祖先杜預がかつて

当陽県侯に封じられたことを指す。

鼎銘 かなえに彫り込まれたかがやかしい功名。

照曜 照り輝く。『文選』卷八、司馬相如「上林賦」に「煌煌扈扈として、鉅野に照曜す」とある。朱本は「曜」を「炤」に、仇本は「照曜」を「炤耀」に作る。全唐文は「曜」を「耀」に作る。

明時 平和に治まっている世の中。

先君 先祖。杜恕や杜預など杜甫の祖先。

恕 杜恕（一九八～二五二）は、三国・魏の人。字は務伯。杜預の父で、杜甫の十四代前の祖先であり、気位が高く剛直な人物であった。太和中、散騎黃門侍郎となる。朝廷にあつてもむやみに交際を結ばず、公けの仕事に専念した。ついで幽州刺史となり、程喜に効奏され、章武郡に移つて卒した（『三国志』魏書卷十六、杜恕伝）。

預 杜預（二二二～二八四）は杜甫の十三代前の祖先。晋の人。恕の子。字は元凱。諡は成。泰始中、河南尹、秦州刺史を歴任し、度支尚書に至り、政治上の損得を適切に裁量したので、世間の人々は杜武庫と称した。後、官は鎮南大將軍、都督荊州諸軍事。呉を平定した功を以て当陽県侯に封じられ、杜征南とも称される。著に『春秋左氏経伝集解』などがある（『晋書』卷三十四、杜預伝）。

「奉儒守官、未墜素業矣」二句 杜家が儒学を尊んで奉じ、官職につとめて守り、家伝統の仕事を継続してきたことをいう。「素業」は、家が代々受け継いでいる本来の業。ここでは儒官。『三國志』魏書卷二十七、徐胡伝の評に「徐邈は清尚にして弘通、胡質は素業貞粹（混じりけがなく美しい）なり」とある。また、『文選』卷三十八、任昉「爲范尚書讓吏部封侯第一表（范尚書の為に吏部封侯を讓る第一表）」に「臣本自ら諸生にして、家は素業を承く」とある。

亡祖 死んだ祖父杜審言。

尚書膳部員外郎 尚書省の礼部に属する膳部の員外郎（從六品上）。

先臣 死亡した臣下。君主に対して、祖父杜審言を指す。審言 杜審言（六四五？～七〇八）は、唐、襄陽の人。字は必簡。進士。隰城尉となり、洛陽丞に累遷した。事に坐して吉州司戸に貶されたものの、武則天の長安二年（七〇二）に著作佐郎を拝し、三年に尚書膳部員外郎に遷った。文章に優れ著名となり、蘇味道、李嶠、崔融とともに「文章四友」と称され、「崔李蘇杜」とも称された。ついで中宗の時代に、修文館直学士に至って卒し、死後著作郎を贈られた（『新唐書』卷二〇一、文芸伝・杜審言、『旧唐書』

卷一百九十上、文苑伝・杜審言）。

「脩文於中宗之朝、高視於藏書之府」二句 杜審言は、中宗の景龍元年（七〇七）に国子監主簿に招かれ、ついで二年に修文館直学士を加えられ、さらに死後、著作郎を贈られた。このように優れた文学の才能によって出仕したことをいう。「高視」は、高い所を見ること。また、高みより見る。ここでは、著作佐郎、修文館直学士などの文官として高い見識を現すこと。『文選』卷七、揚雄「甘泉賦」に「仰ぎて首を擡げて以て高視し、目は冥眴して、見る亡し」とあり、張九齡の「集賢殿書院奉勅送学士張説上賜燕序（集賢殿書院にて勅を奉じて学士張説の賜燕に上るを送るの序）」に「前古を高視するに、独り今に在らざらんや」とある。「藏書之府」は、秘書省著作局、あるいは門下省修文館のこと。高本、朱本、張本、謝本は「脩」を「修」に作る。

学士 学問をする人。学者。『史記』卷一百二十一、儒林伝序に「天下の学士、靡然として風に郷う」とある。

（二）

臣幸頼先臣緒業、自七歳所綴詩筆、向四十載矣、約千有餘篇。今賈馬之徒、得排金門、上玉堂者甚眾矣。唯臣衣不蓋

體、常寄食於人、奔走不暇、只恐轉死溝壑。安敢望仕進乎。伏惟天子哀憐之。明主儻使執先祖之故事、拔泥塗之久辱、則臣之述作、雖不足以鼓吹六經、先鳴數子、至於沈鬱頓挫、隨時敏捷、而揚雄枚皋之流、庶可跂及也。有臣如此、陛下其舍諸。伏惟明主哀憐之。無令役役、便至於衰老也。臣甫誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪。

臣幸いに先臣の緒業に頼りて、七歳自り綴る所の詩筆、四十載に向として、約千有餘篇なり。今賈・馬の徒、金門を排し、玉堂に上るを得る者は甚だ衆し。唯だ臣のみ衣は体を蓋わず、常に人に寄食し、奔走して暇あらず、只だ溝壑に転死せんことを恐るのみ。安んぞ敢て仕進を望ま

んや。伏して惟んみるに天子之を哀憐せよ。明主儻使先祖の故事を執りて、泥塗の久辱より抜かば、則ち臣の述作、以て六經を鼓吹し、數子に先鳴するに足らずと雖も、沈鬱・頓挫、隨時・敏捷に至りては、揚雄・枚皋の流、跂及す可きに庶かなり。臣の此くの如き有らば、陛下其れ諸を捨てんや。伏して惟んみるに明主之を哀憐せよ。役役として、便ち衰老に至らしむる無かれ。臣甫誠に惶れ誠に恐る。頓首頓首。死罪死罪。

私は幸いに先君にお仕えした亡き祖父杜審言の事業のお蔭で、七歳から綴った詩文の数は、今やそれから四十年に近づいて、約千余篇を数えるほどになりました。今、漢の賈誼や司馬相如のように文章の才能がある者たちは、天子の金門を開いて玉堂へと上ったものが大勢おります。しかし、私だけは衣服が体を覆うのにたらず、常によそ様に寄食して、東へ西へと走り回って余裕がありません。そうしてどぶや溝に落ちて野たれ死にすることを心配しているしまつです。(そのような状態ですから) どうして、進んで仕官することを望んだりするでしょうか。

私が謹んで考えますに、天子様には、どうか私を不憫に思ってくださいますように。英明なる陛下が、もし私の先祖があげた輝かしい勲功の例をお取り上げになり、長く汚泥にまみれていた恥辱から拔擢してくださいますならば、私の著述は、儒家の根本思想である六經を勢いづけ、先秦の諸子よりまさるには不十分かもしれませんが、重く深い情感や、どここおる表現、また時に応じた表現やすばい転換など、文章表現上での変幻自在さでは、揚雄や枚皋のような詩文に優れたものがらにも、ほぼ追いつけるでしょう。このような文才ある臣下がいるとすれば、陛下はお見捨て

になるでしょうか、いやお見捨てにはならないでしょう。考えてみますに天子様には、どうか私を不憫だと思ってください。私に勞苦させ、このまま年を取って老け込ませることがないようになさってください。臣下である私杜甫は恐れかしこまっております。

幸頼 幸いにおかげを蒙むる。

緒業 祖先が後に残した事業。仕事。

「自七歲所綴詩筆、向四十載矣、約千有餘篇」三句 七歳から作ってきた詩文は、今や四十年に近づきつつあり、約千余篇にのぼる。杜甫の「壯遊」(『詳注』巻十六)にも、

「七齡思已即ち壮なり、口を開きて鳳凰を詠ず」とある。

「詩筆」は、詩歌と文章。「向」は、近づく、接近する。この年、杜甫は四十三歳となり、執筆期間は、七歳から数えると三十六年となり四十年に近づいている。「千有餘篇」という数は、虚言ではないだろう。杜甫が若い時期に創作していた詩文はかなり多かったと推測されるが、この時期の作品の多くは伝わっていない。

賈馬 漢の賈誼と司馬相如の併称。共に文章家として名前があった。『晋書』巻九十二、文苑伝に「西都の賈・馬は、靈蛇を掌握に耀かせ、東漢の班・張は、雕龍を綈縑に発

す」とある。

排金門、上玉堂 天子の門を押し開いて宮殿に上る。朝廷で重用を受けるに至ること。「排」は、押し開く。「金門」は、漢代の宮門の名で、金馬門のこと。「玉堂」は、漢代の宮殿の名で、元は未央宮の属殿玉堂署をいう。いずれも学者が詔を待つ所。後世、翰林院や翰林学士を指すようになった。『三国志』魏書巻十九、陳思王伝に「金門を排き、玉陛を踏む」とあり、また、『文選』巻四十五、揚雄「解嘲」に「今吾子幸いに明盛の世に遭ひ(中略)、金門を歴て玉堂に上るを得ること日有り」とある。

甚厭 朱本は「厭」を「多」に作る。

「唯臣衣不蓋體、常寄食於人、奔走不暇」三句 自己の生活の困窮をいう。「衣不蓋體」は、衣服が体を覆うのに十分でない。「寄食於人」は、他人の家に身を寄せて生活する。いさうろろする。『史記』巻九十二、淮陰侯伝に「常に数々其の下郷南昌の亭長に従つて寄食す」とある。困窮の様子は、杜甫「奉贈韋左丞丈二十二韻」(韋左丞丈に贈り奉る二十二韻)、『詳注』巻一)に「朝に富兒の門を叩き暮れに肥馬の塵に随う。残杯と冷炙と、到る処に潜かに悲辛す」とある。朱本、張本、仇本、全唐文は「唯」を「惟」に作る。また、朱本、仇本は「常」を「嘗」に作る。

英華は「暇」を「暇」に作る。

「只恐轉死溝壑。安敢望仕進乎」二句 野たれ死にするのではないかと恐れると、婉曲に自身の窮迫を訴えることで、仕官の望みを述べる。「転死」は、溝や谷で倒れた状態で死ぬ。野たれ死にして埋葬されないこと。「溝壑」は、みぞ。どぶ。『孟子』梁惠王篇に「凶年饑年のとき、君の民の老弱は溝壑に転び、壮者は散じて四方に之く者、幾千人なり」とあり、『史記』卷七十九、范雎伝に「使臣卒然として溝壑を填めんこと、是れ事の知るべからざる者の三なり」とある。杜甫「醉時歌」に「但だ覚ゆ 高歌して鬼神有るを、焉んぞ知らん 飢死して溝壑に填むるを」(『詳注』卷三)とある。「仕進」は、官職につく。英華は「只」を「祗」に、文粹は「祗」に、仇本は「祗」に作る。伏惟 伏以に同じ。謹んで考えますに。下位の者が上位の者に対する謙辞。『文選』卷三十七、李密「陳情事表(情事を陳ぶる表)」に「伏して惟んみるに聖朝孝を以て天下を治む」とある。

天子 玄宗皇帝を指す。英華、文粹、仇本、全唐文は、「天子」を「明主」に作る。

明主 賢明な天子。明君。英華、文粹、仇本、全唐文は「明主」の語なし。

儻使 もし。もしくは。仇本、全唐文は「儻」を「倘」に作る。

執先祖之故事 校注は、祖父杜審言が則天武后によって重んじられた先例を指す、とする。長安二年(七〇二)、武后は杜審言を召し出し、拔擢しようとした。ただし、祖先は、杜審言だけでなく、遠祖杜預を含めて言ったものであろう。

拔泥塗之久辱 長い間仕官できずに苦しんでいた低い地位や境遇から、拔擢して重用すること。

足以 仇本は、「足以」を「能」に作る。

鼓吹六經 六經(詩・書・礼・樂・易・春秋の六つの儒家の經典)を高く宣揚する。

先鳴數子 先秦の諸子よりまさっている。「先鳴」は、さきがけて声をあげる。『春秋左氏伝』襄公二十一年の「州綽曰く、平陰の役、先ず二子鳴く」の杜預注に「自ら鶏聞い勝ちて先ず鳴くに比す」とある。「數子」は、先秦諸子。

沈鬱頓挫 「沈鬱」は、辞句が停頓、渋滞すること。また、深い含蓄のある表現。『全漢文』卷四十、劉歆「與揚雄書(揚雄に与うる書)」に「子雲 澹雅の才、沈鬱の思いに非ずんば、経年鋭精して、以て此の書を成す能わず」とある。

「頓挫」は、表現方法の一つで、文勢を変化させ、強い筆法を急にやわらげる叙述をいう。『文選』卷十七、陸機「文賦」に「箴は頓挫して清壮なり」とあり、李善注に「箴は得失を譏刺す。故に頓挫して清壮なり」とある。

隨時敏捷 迅速で適宜の才能。「隨時」は、時にしたがって適宜に行動すること。時宜に応じること。『易』隨の象に「大いに亨り、貞し、咎無く、天下時に随う、隨時の義、大いなるかな」とある。「敏捷」は、すばやい。『西京雜記』卷三に、「枚皋の文章は敏疾、長卿の製作は淹遲なり、皆一時の譽を尽くす。而して長卿の首尾は溫麗にして、枚皋は時に累句（煩雜な句）有り。故に疾行、善跡無きを知る。」とある。

而 朱本、仇本は「而」の字なし。

揚雄枚皋之流 前漢の辭賦の大家揚雄や枚皋のような詩文に優れたものがら。宋本は「揚」を「楊」に作る。朱本、仇本は「流」を「徒」に作る。

庶 ちかい。ほとんどそれらしい。

跂及 企てて及ぶ。追いつく。「企及」。『晋書』卷三十四、杜預伝に「徳は以て企及すべからざるも、立功立言は庶幾かるべきなり」とある。朱本、仇本は「跂」を「企」に作る。

臣 英華は「臣」を「人」に作る。

陛下 天子の敬称。臣下が天子を直截にささないで、階段の下にいる近臣を媒介にして間接にいう。

舎 とどめる。ほどこす。英華は「舎」を「捨」に作る。

役役 身や心を勞するさま。『莊子』齊物論篇に「終身役役として、其の成功を見ず」とある。

惶恐 おそれる。「惶恐再拜」は、おそれかしこまって再拝する。上奏文の末尾に用いて敬意を表す言葉。

頓首頓首、死罪死罪 上奏文の末尾に用いて敬意や恐縮の意を表す言葉。「頓首」はもとの意は、頭を地面まで下げ地面にうちつける敬礼。「死罪」は死に相当する罪の意。

(三)

臣以爲鵬者、鷺鳥之殊特。搏擊而不可當。豈但壯觀於旌門、發狂於原隰。引以爲類、是大臣正色立朝之義也。臣竊重其有英雄之姿。故作此賦、實望以此達於聖聰矣。不揆蕪淺、謹投延恩、進表獻賦以聞。謹言。

臣以爲えらく鵬なる者は、鷺鳥の殊特なり。搏擊するも當るべからず。豈に但だに旌門に壯觀にし、原隰に発狂するのみならんや。引きて以て類と為さば、是れ大臣の色を正

し朝に立つの義なり。臣竊かに其の英雄の姿有るを重んず。故に此の賦を作りて、実に此を以て聖聰に達せんことを望む。蕪浅を揆らず、謹しんで延恩匭に投じ、表を進め賦を献じて以て聞す。謹しんで言す。

私が思いますに、鵬という鳥は、鷹や隼など猛禽類の中でも特別優れた存在です。（他の鳥が）撃つてもかないません。どうして天子の狩獵の際の立派に飾られた御座所に威儀を添え、平原や湿地で勇猛さを發揮するだけの存在でありましょうか。（いやそれだけではありません）。たとえるなら、（それは）大臣が顔色を厳正にし、朝廷に立つ正しい姿なのです。私は心の中で鵬という鳥に英雄のたまたまいがあることを重要だと思っています。そこで鵬の賦を作つて、これを天子様のお耳に達することを本当に望んでおります。自らの見識があさはかであることをはからず、天子様の設置されている延恩匭にこの文を寄せて、表文を天子様に進呈し、鵬の賦を献上して天子様のお耳に入れたく存じます。謹んで申し上げます。

臣 英華、文粹は「臣」の字なし。

鵬 全唐文、謝本は「鵬」を「雕」に作る。

鷲鳥 あらあらしい鳥。鷹、隼などの猛禽類。『文選』卷三十二、及び『楚辞』の戦国・屈原「離騷」に「鷲鳥の群せざるは、前世よりして固に然り」とあり、『文選』卷十三、晋・張華「鷲鷲賦」に「蒼鷹は鷲にして縲を受く」とある。

壯觀（鵬が）天子が狩獵する時の儀仗に威儀を添える。

旌門 天子が行幸し、そこで祭りなどを行う時に、御座所の前に設ける旗で飾つた門。『周礼』天官・掌舍に「帷宮を為り、旌門を設く」。ここでは、天子の狩獵の際の立派な御座所をいう。

發狂 鵬が狩獵時に常軌を逸したような勇猛さを發揮すること。『老子』第十二に「馳騁田獵は、人の心をして発狂せしむ」とある。

引以爲類 鵬のこのような精神をたとえるならば。

大臣正色立朝 ここでは、鵬の高潔な精神が、ちょうど大臣が顔色を厳正にして朝廷に立つ正しい行ない・ふるまいに符号することを言う。『春秋公羊伝』桓公二年に「孔父色を正して朝に立つ」とある。

英雄之姿 鵬の勇猛で何ものも恐れない素質、姿勢。

望 朱本は「望」の字なし。

聖聰 皇帝の敬称。

矣 英華、文粹、仇本、全唐文は「矣」を「耳」に作る。
不揆蕪淺 自らの見識の浅はかさをはからず。

延恩匭 皇帝（朝廷）に臣下が直接意見を投じることのできる投書箱、意見箱。唐代、則天武后の執政時に始まり、銅を鑄て箱を作った（『新唐書』百官志二）。専ら、仕官を求める者が賦や頌を献ずるのに供された。『唐六典』中書省集賢院史館匭使卷九に記載がある。（6）

（獻）賦 英華、仇本は「賦」を「上」に作る。

注

（1）『釈名』卷六、釈書契に「下上に言うを表と曰う。之を内に思い、表して外に施すなり」とあり、『文選』卷三十七、表の李善注に「表とは、明らかにするなり、標すなり。物をして標表するが如し。言うところは事序を標著し、之をして明白ならしめて以て主上を曉し、其の忠を尽くするを得さしむるを表と曰う」とある。

（2）「鵬賦」を献じたのは「三大礼賦」に先だつとし、「三大礼賦」を献じたのが天宝十載（七五二）であれば、「鵬賦」を献じたのは天宝九載であるとする説（黄鶴、朱鶴齡など）もある。

（3）吹野氏は、第二段落を二つに分け、全四段とする。

（4）「鵬」の割注に「音は洞。和名は於保和之」とある。

（5）「鵬」をミサゴとする説もある。

（6）「匭使院、知匭使一人。知匭使は天下の冤滞に甲し、以て万人の情状を達するを掌る。匭を立つるの制、一房四面にして、各々方色を以てす。東は「延恩」と曰い、材を懷き器を抱き、聞達を希む者之に投ず。南は「招諫」と曰い、正を匡し過を補い、政理を裨くる者之に投ず。西は「申冤」と曰い、冤を懷き屈を負い、辜無く刑を受くる者之に投ず。北は「通玄」と曰い、賦を献じ頌を作り、論すに大道を以てし、玄象を渉るに及ぶ者之に投ず。その匭出だすには辰の前を以てし、入るには未の後を以てす」とある。

（長野県立大学）